校註竹取物語

松尾聰著

笠間書院刊

註竹取物語

尾聰著

笠間書院刊

昭和四十三年四月十五日　初版印刷
昭和四十三年四月二十日　初版発行

著者の検印省略

松尾　聰（まつお　さとし）
明治四〇年（一九〇七）東京青山に生まれる。昭和六年東京帝国大学文学部国文学科卒業。同九年同大学院修了。法政大学専任講師、学習院教授を経て、現在、学習院大学文学部教授。文学博士。平安時代の物語専攻。「平安時代物語の研究」「全釈源氏物語一～五（桐壺～絵合）」「以下続刊」「校注落窪物語」「校注浜松中納言物語」などのほかに、学生向きの参考書として「万葉の秀歌」「竹取物語全釈」「徒然草全釈」「古文解釈のための国文法入門」などの著書がある。

校註　竹取物語
定価一〇〇円

東京都港区北青山二ノ一〇ノ一八
著者　松尾　聰

東京都江東区深川白河町三ノ六ノ一
発行者　池田猛雄

東京都荒川区西日暮里五ノ九ノ八
印刷者　山岡景恭

東京都千代田区神田神保町一ノ四六
発行所　笠間書院
電話東京（二九四）〇九九六番
振替口座東京　五六〇〇二番

三美印刷・手塚製本

凡例

一　本書は高等学校・短期大学・大学一般教育課程ならびに専門課程の教科用書として編纂した。

一　本書の本文は、伝本のうち善本と思われる古活字版十行本を底本としたが、誤脱とみとめられる個所や、通行の本文と特に差のいちじるしい個所などについては、古典文庫所収の天正奥書本（武藤元臣氏旧蔵天理図書館現蔵）ならびに新井信之氏の「竹取物語の研究本文篇」所収の「古本」・蓬左文庫蔵本・前田善子氏蔵本・戸川浜男氏蔵本・島原侯旧蔵本（日本大学図書館蔵）などを参考して、仮りに改めたこともある。ただしその場合は、すべて頭注に底本本来の姿を示しておいた。なお底本の仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一し、また句読点や会話のかぎを加え、漢字を仮名、仮名を漢字に改めなど、すべて初学者の読みやすいようにしようとこころがけた。

一　頭注は、わかりにくい個所や疑わしい個所に重点をおいてほどこした。中古文を正確に理解しようと心がける若い学生諸氏の手助けとなるならば、幸である。

一　読解の便を考えて、全篇を田中大秀の「竹取翁物語解」に従って九分したが、もとより原作にはこのような区分や題名はなかったものである。

一　終りに、「解説」と、「参考文献」として「今昔物語・海道記」所載の竹取説話を付載した。

目次

凡例
本文
一　かぐや姫のおひたち……一
二　つまどひ……二
三　仏の御石の鉢……九
四　蓬莱の玉の枝……一〇
五　火鼠の皮衣……一九
六　竜の頸の珠……二四
七　燕の子安貝……三一
八　御狩のみゆき……三八
九　姫の昇天……四五
解説・参考文献

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(1)物語や説話の書き出しにみられるきまったことば。
(2)竹取という業は、土地を持って定着しておこなう農耕より、まずしく身分のいやしい者のしごとであったらしい。しかし竹は霊力があるものと考えられていたから、この老人は、身分はいやしいながら神聖な仕事にたずさわっている者ということになる、といわれる。
(3)この種の「けり」を伝承回想の意をあらわすとして「……たとさ」と訳す考があるが、そこまではっきり訳語にあらわすのは、いささか行きすぎているようである。「き」(直接経験した事実の回想)との訳しわけは、いちおうあきらめて「……た」と訳しておくよりしかたがあるまい。
(4)「さるき」は古典文庫所収天正本では「さかき」、群書類従本では「さぬき」。後文にこの翁を「みやつこまろ」とよんでいるから、ここの「みやつこ」はその略と考えられる。
(5)「竹」の次に底本は「なん」があるが、古本(新井信之氏「竹取物語の研究・本文篇」所収)によって仮りにけずる。
(6)かわいらしい状態ですわっている。
(7)「おはす」は中古ではサ変活用であったようである。
(8)「籠(こ)」をかけたことばのしゃれ。
(9)「女」は「女↑をんな↑おんな↑おみな・おうな(嫗)」の誤写かともいわれる。
(10)鳥籠と考えてよかろうか。この物語の女主人公かぐや姫は、のちに天に昇る。鳥(天をとび天と地とを連絡する)の化身としての伝説のかげが添っていることに注意。

一　かぐや姫のおひたち

今(1)は昔、竹取(2)の翁といふ者ありけり(3)。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづの事につかひけり。名をばさるき(4)のみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹(5)一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくし(6)うてゐたり。翁言ふやう、

「我朝(あした)ごと夕(ゆふべ)ごとに見る竹の中におはする(7)にて知りぬ、子(8)になり給ふべき人なめり」

とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻(め)の女(9)にあづけて養はす。うつくしき事限りなし。いと幼ければ、籠(こ)(10)に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後(のち)に、竹取るに、節(ふし)をへだてて(11)よごとに、こがねある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁、やうやう(12)ゆたかになり行く。この児(ちご)養ふ程に、すくすくと大きになりまさる(13)。三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上げなどさう(15)して、髪

あげさせ裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちのけそうなること、世になく、屋のうちは暗き所なく、光りみちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事もやみぬ。腹立たしき事も慰みけり。

翁竹を取る事、久しくなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名をみむろといむべのあきたをよびてつけさす。あきた、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず、よびつどへて、いとかしこく遊ぶ。

二　つまどひ

世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでてまどふ。そのあたりの垣にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、よるはやすきいも寝ず、闇の夜に出でても、穴をぐじり、かいまみ、まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。

(1)裳は、腰から下にまとった衣。中古、婦人の正装のとき、袴の上に、腰から下の後方だけにつけた。「着す」は下二段他動詞。十二、三、四歳のころ、髪上げと同時に裳着の式をおこなった。

(2)顕証。ただし古本は「けうら」。「けそう」は「けうら」の誤写とみることも可能である。

(3)「三室戸（山城国宇治の地名にある。ただし後世の名かともいう）の斎部（祭祀をつかさどる氏族）の秋田」と当てるべきか。

(4)なよなよとしなう竹。女のなよやかな姿にたとえて用いられる。

(5)古事記の中巻に垂仁天皇の妃、迦具夜比売命（カグヤヒメノミコト）の名が見える。「かぐ」は「かがやく」意であろうといわれ、又、中古では「かがやく」は清音で「かかやく」といわれたということから「かくや姫」とよむべきだとする説もある。ただし「かがよふ」「かぎろひ」などが濁音であることから「かぐや」も濁音であるべきだとする反論もある。

(6)「手をうってその手を高くあげる」「手をあげてうちならす」「声をうちあげる」など諸説があるが、たしかでない。（「うちあげ」を約して「うたげ（宴）」という語ができる）

(7)「うけ入れるについてきらわず」の意か、というが、たしかでない。

人の物[1]ともせぬ所にまどひありけども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて言ひかくれども、こととともせず。あたりを離れぬ君たち、夜を明かし、日を暮らす多かり。おろかなる人は、[2]ようなきありきはよしなかりけりとて、来ずなりにけり。[3]

その中になほいひけるは、色好みといはるる限り五人、思ひやむ時[4]なく、夜昼きたりけり、その名ども、石作の皇子[5]、車持の皇子、右大臣阿倍のみむらじ[6]、大納言大伴の御行[7]、中納言石上のまろたり[8]、この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつつ、かの家に行きて、たたずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず。わび歌など書きておこすれども。[10] かひなしと思へど、十一月、十二月の降りこほり、六月の照りはたゝくにもさはらず来たり。[11]

この人々、ある時は竹取を呼び出でて、

(8)底本「よひほとへて」を古本などによって仮りに改めた。
(9)はなはだしく。
(10)「賞美して心混乱する」意と解くべきか、「むちゃくちゃに（ひどく）賞美する」意と解くべきか、なお定めかねる。
(11)「戸・門」説「外」説がある。
(12)もと「目見（まみ）」に「かき」（接頭語）の音便「かい」が冠せられた語であろうが、「垣間見」の文字を当てられてから、そのような意をもつようになったらしい。
(13)「呼（ぶ）」の未然形「呼ばー」に上代の継続の意の助動詞「ふ」の連用形「ひ」の添った「呼ばひ」が体言化した語。よびつづけること。男が女のもとをたずねて戸外で相手をよびつづける習俗から、求婚の意となった。ここではそれをこっそり夜這（い）うようにして女のもとをうかがう意にこじつけて、しゃれたのである。（従って、作者は「夜這ひ」を求婚の意の「よばひ」の語源とは考えていなかったわけである。）

(1)「物音もせぬ」の意か。「てんで問題にしない」の意か。
(2)おろそかな・十分熱意をもっていない。
(3)用なき。「益（ヤウ・ヤク）なき」「要（エウ）なき」のかなちがいだとする説もある。
(4)「思ひやむ……きたりけり」は挿入句か。
(5)日本書紀、持統天皇十年冬十月己巳朔庚寅（二十二日）の条に「仮二賜ニ一ッ正広参位右大臣丹比真人ニ資人（ツカサビト）一百廿人、正広肆大納言阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行ニ、並ニ八十人、直広壱石ノ上朝臣麻呂、直広弐藤原朝臣不比等ニ、並ニ五十人一」とあるが、その中の「阿倍御主人・大伴御行・石上麻呂」をここの「阿倍のみむらじ・大伴御行・石上のまろたり」にあてたことは疑いあるまい。さらに、加納諸平は「車持皇子」は

藤原不比等だとする。不比等は表向きは鎌足の二男であるが、母は車持国子の娘で、もと天智天皇の妃であったのが、天皇の子をはらんだまま、鎌足に下賜され、生んだ男子が鎌足の子となったわけである（公卿補任・帝王編年記）。だから世人は知っていて、車持皇子とよんでいたのだろうとするのである。さらにのこりの石作皇子ひとりが実在の人に擬せられないのは疑わしいとの立場から諸平は、丹比真人をこれに当てている。丹比真人嶋公は右大臣多治比王の子で宣化天皇の曽孫である。一方、姓氏録には丹比・石作二氏は和泉国の神別で同祖とあるから、「石作皇子」という名ができたのであろうというのである。

(6) 底本「左大臣」であるが、古本・天正本・島原本などに「右大臣」とあるのによって仮りに改めた。

(7) 源氏物語、絵合の巻に「あべのおほし」とある。「みむらじ」は「おほし」の転々誤写かともいわれるが、不詳。

(8) 底本「もろたり」を天正本その他諸本によって仮りに改めた。古本は「まろたふ」

(9) 「わぶ」は、期待外れのことなどがあってがっかりしてなげく意。「わび歌」はがっかりして悲しみなげく歌。

(10) 下に「返事もせず」などの省略がある。

(11) 「さはる」は「さふ」（下二段他動詞。「切る」と複合して「さへ切る」となる）の自動詞。進みがとまる・さしつかえる。「さはらず」は「ものともしないで」ぐらいの意。

(1) 「なす」は「生む」の意の四段動詞。

(2) むりに・むしょうに。「我(ワ)な（のノ古語）勝ち」が語源かという。

(3) 「見え」は「見られ」の意。相手から見られること。

(4) 「言ふやう『……』と言へば」の形は、漢

「娘を我にたべ」

と、伏しをがみ手をすりのたまへど、

「おのがなさぬ[1]子なれば、心にも従はずなむある」

と言ひて、月日すぐす。かゝればこの人々、家に帰りて物を思ひ、祈をし願を立つ。思ひやむべくもあらず。さりともつひに男あはせざらむやはと思ひて、頼みをかけたり。あながち[2]に志を見え[3]ありく。

これを見つけて、翁かぐや姫に言ふ[4]やう、

「我が子の仏、変化[5]の人と申[6]しながら、こゝら[7]大きさまで養ひ奉る志、おろかならず。翁の申さむ事、聞き給ひてむや」

と言へば、かぐや姫、

「何事をか、のたまはむ事は承らざらむ。変化の者にて侍りけむ身とも知らず[8]、親とこそ思ひ奉れ」

と言ふ。翁、

「うれしくものたまふものかな」

と言ふ。

「翁、年七十(1)に余りぬ。今日(けふ)とも明日(あす)とも知らず。この世の人は、男は女にあふ事をす、女は男にあふ事をす。そののちなむ門(かど)広くもなり侍る。いかでかさる事なくてはおはせむ」

かぐや姫のいはく、

「なんでふさる事かし侍らむ(3)」

と言へば、

「変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし(4)。この人々の年月をへて、かうのみいましつゝのたまふ事を、思ひ定めて、ひとりひとりに、あひ奉り給ひね(5)(6)(7)」

と言へば、かぐや姫いはく、

「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、のちくやしき事もあるべきをと、思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らでは、あひ難しとなむ思ふ(8)」

文訓読の語法。源氏物語以後の女流文学作品には見られない。

(5)わたしの子である仏のような大切な人よ。

(6)「申す」は「いふ」の謙譲語。「申しあげる」と訳す。娘ながら、「変化の人」なので翁が敬意を表するのである。

(7)「ここら」は「たくさん」の意の副詞。名詞の「大きさ」を修飾するのは異例であるが、計量や方角などに関する語の場合、こうした言い方がある。(源氏、若紫「ただこのつゞら折の下に。」「ただ」は「下」を修飾している。)

(8)「ず」は連用形。

(1)後段(四九ページ)では地の文に「今年は五十ばかりなりけれども」とあって、年齢がくいちがっている。ここは会話の文だから、翁自身誇張して言ったものと解とうとすれば、解けないことはない。

(2)いうことには。「いふあく」の約で、「あく」は古代の「こと」の意をあらわす体言だといわれる。

(3)「なにといふ」の約であるが、転じて副詞として「なんだって」の意に用いられる。

(4)「いまそかり」(ラ変活用)は「ある・いる・行く・来る」などの尊敬語。中古前期に多く用いられた。

(5)「かし」は、自分の言っていることが理に合っているという確信をもって人に物をいうきもちをあらわすといわれる。

(6)「幾人もある中で、そのうちの一人」の意。右今集、恋三「思ふどちひとりひとりが恋ひ死なば誰によそへて藤衣着む」(下句は「世間に秘密の二人の仲なのだから、一体誰にかこつけて、身内の者の着る喪服を着たらよかろうか」の意)。

(7)「ね」は完了の「ぬ」の命令形。ただし底本「給ね」であるから「給はね」とよんで、

と言ふ。翁いはく、

「思ひのごとくものたまふかな。そもそもいかやうなる志あらむ人にか、あはむとおぼす。かばかり志おろかならぬ人々にこそあめれ」。

かぐや姫のいはく、

「何ばかりの深きをか見むと言はむ。いさゝかの事なり。人の志ひとしかんなり。いかでか、中に劣り勝りは知らむ。五人の中にゆかしき物を見せ給へらむに、御志まさりたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ」

と言ふ。

「よき事なり」

とうけつ。

日暮るる程、例の集まりぬ。或は笛を吹き、或は歌を歌ひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でていはく、

「忝けなく、きたなげなる所に年月をへて物し給ふ事、極まりたるかしこ

「ね」を上代に用いられ、中古でも初期には用いられたらしい希求の助詞（「……てくれ」の意）と解くこともできる。

(8) 天下第一の。

(9) 身分が高くて恐ろしい・貴い。

(1) 「なり」は伝聞・推定の助動詞。活用語の終止形に添う。中古からはラ変には連体形に添うといわれるが、おおむねは「あンなり」（「あンなり」は「ありなり」の音便だと考えることは可能であろう）の形であらわれていて、「あるなり」の形でみえるものは、その文献（写本）の信用度の低いものばかりのようであるから、今後の研究に待たねばならない。「あなた（翁）の話できくと、それらの人の私に対する志は、どうやら皆等しいようです」の意。

(2) 給へ（四段已然形）ら（「り」の未然形）む（「む」の連体形）に。

(3) 「例の」は、中古語として「いつものように」の意の連用修飾語として用いられた。

(4) 底本「或は」。したがって「あるは」とよむ説もある。「あるい」の「い」は古代の主格助詞かといわれる。

(5) 笛や琴の譜をうたうこと。

(6) 「口笛を吹く」＝低声で口をつぼめて歌などを吟じる」などの意。

(7) 扇で手のひらなどをうって拍子をとることか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(1)「と申すも理なり」が解きにくいので、仮りにこの「翁の命」以下「定むべき」までを、姫が翁に答えた詞をそのまま翁がきんだちにつたえたものとして解いておく。
(2)あなた（翁）が私（姫）にいう（「申す」をつかっているのは、その姫の詞を、翁が君達に伝え言うときに、翁の立場から姫に敬意を表したのである）のも、もっともです。
(3)「さだめがたし。ゆかしくおもひ侍ものの侍るを見せ給はむに」は仮りに古本によって補った。
(4)見られるでしょう・自然きっとあらわれるでしょう。

(5)南山住持感応伝「世尊初成道ノ時、四天王奉ニ仏ニ石鉢ヲ、唯世尊得レ用ヰルヲ、余人ハ不レ能ハ持ッ、如来滅後安ニ(トド)メ鷲山ニ与ニ白毫光ニ共ニ為ニス利益ニ」、西域記「波剌斯国ニ云々、釈迦仏ノ鉢在ニリ此ノ王室ニ」（以上「河社」による）。水経注「西域ニ有ニリ仏鉢、今猶在ヾ其色青紺ニ而光ル」（田中大秀の解による）。
(6)古本「あんなり」。あるそうです・あると聞きます。

まり」

と申す。

『翁の命[1]、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達（きみたち）にも、よく思ひ定めて仕うまつれと申すも理（ことわり）なり。いづれも劣り勝りおはしまさねば、定め難し。ゆかしく思ひ侍る物の侍るを見せ給はむに御志の程は見[4]ゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき』と言へば、これよき事なり。人の恨みもあるまじ」

と言ふ。五人の人々も

「よき事なり」

と言へば、翁入りて言ふ。

かぐや姫、

「石作の皇子には、仏[5]の御石（みいし）の鉢（はち）といふ物あり。それを取りて賜へ」

と言ふ。

「車持の皇子には東（ひんがし）の海に蓬莱といふ山[6]あるなり。それに銀（しろがね）を根とし、

金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ[1]」

と言ふ。

「今一人には、もろこしにある火鼠[3]のかはぎぬを賜へ。大伴の大納言には、竜[4]の頸に五いろに光る珠あり。それを取りて賜へ。石の上の中納言には、燕の持たる子安[5]の貝、取りて賜へ[6]」

と言ふ。翁

「難き事にこそあなれ。この国に有る物にもあらず。かく難き事をば、いかに申さむ[7]」

と言ふ。かぐや姫

「何か難からむ」

と言へば、翁

「とまれかくまれ申さむ」

とて、出でて

「かくなむ。聞ゆるやうに、見せ給へ[8]」

(1)「賜はる」は四段動詞。いただく。
(2)「もろこし」は「諸越」の訓読といわれる。わが国ではじめ呉越（中国南部）と交通が開けたところから、中国はすなわち諸越と考えたのだろうという。
(3)和名抄「火鼠、神異記ニ云フ火鼠、比禰須美、取ニリテ其ノ毛ヲ織リテ為レス布ト、若シ汙（ケガ）レバ以テ火ヲ焼キ之ヲ更ニ令ニム清潔ナラ矣」
(4)荘子、雑篇「夫レ千金之珠ハ必ズ在ニリ九重之淵ニシテ驪竜（リリョウ）（黒イ竜）ノ頷（アギト）ノ下ニ」
(5)宝貝科の一種。安産のまもりに用いたといわれる。
(6)この上に古本その他多くの本には「一つ」がある。
(7)（あなたのお話できくと）それはどうやらむずかしいことのようです。
(8)底本「見給へ」であるが、古本に従って仮りに改めた。

と言へば、皇子達、上達部聞きて、

「おいらかに『あたりよりだになありきそ』とやはのたまはぬ」

と言ひて、うんじて皆帰りぬ。

三　仏の御石の鉢

なほこの女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て来ぬものかはと、思ひめぐらして、石作の皇子は心のしたくある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千万里の程行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、かぐや姫のもとには、

「今日なむ天竺へ石の鉢取りにまかる」

と聞かせて、三年ばかり、大和の国十市の郡にある山寺に、賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の枝につけて、かぐや姫の家に持て来て見せければ、かぐや姫、あやしがりて見れば、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

海山の道に心をつくし果てないしの鉢の涙流れき

(1)「より」は経過地点をあらわす。……をとおって。
(2)「倦(ッ)みす」「爵(ッ)す」の音便説などがある。
(3)支度。準備・用意。
(4)「まかる」は上代では、尊貴の前から退下する意にのみ用いたが、中古の源氏物語などでは、その意は「まかづ」にゆずられ、「まかる」は、対話や消息文の中で「(自分が)行く」の意を謙譲の態度でいう場合にのみ用いられた。ただしこの物語のころは、まだそれほどはっきりした区別はできかねるようである。したがってここでは「この(尊貴な)日本の都から、天竺に下って行く」意とも、単なる「行く」の謙譲語ともみられ、なおたしかに定めがたい。
(5)「三年ぐらいたってのある時」の意か。
(6)現在の香具山付近という。
(7)十六羅漢の一。白頭長眉の相をそなえている。
(8)すす。
(9)「つきたるを」は「つきたる鉢を」の意。
(10)「泣い(泣きノ音便)し」に「石」、「鉢の」に「血の」をかけた。

(1)七ページ注(5)参照。
(2)五畿内志、大和志「廃セル小倉山寺有レリ」。一〈在ニリ多村ニ〉。一〈在ニリ倉橋小倉山ニ〉。」
(3)「小倉」に「を暗(し)」をかける。
(4)「何を」「何で」どちらの意か、きめがたい。加賀国の白山。姫の容貌の白くて光があるのを白山にとりなした。
(5)鉢に恥をかける。
(6)「何かといい入れる口実を見つけて、あれこれといって」の意か。古本は「いひわづらひて」で、わかりやすい。
(7)「恥かしい」意から転じて「恥を恥とも思わぬ」の意となる。
(8)太宰府付近の次田(スイタ)温泉は万葉集にもみえ、有名である。それらを作者は頭に思いうかべているのであろう。
(9)大阪の古名。
(10)おそば近くお仕えするものだけをつれて。
(11)ひとからは見られなさって・人にはお見せになって。

かぐや姫、光(1)やあると見るに、螢ばかりの光だになし。

おく露の光をだにも宿さましを(2)ぐらの山にて何(3)もとめけむ

とて返し出だす。鉢を門(かど)に捨てて、この歌の返しをす。

しら山(4)にあへば光の失するかとはち(5)を捨てても頼まるるかな

とよみて入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、言ひかかづらひて帰りぬ。かの鉢を捨てて又言ひけるよりぞ、おも(6)なき事をばはぢを捨つるとは言ひける。(7)

四　蓬莱の玉の枝

車持の皇子(みこ)は心たばかりある人にて、おほやけには、「筑紫の国にゆあみにまからむ」とて暇申(いとま)して、かぐや姫の家には、「玉の枝取りになむまかる」と言はせて下(くだ)り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波(8)まで御送りしける。皇子「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまたゐておはしまさず。近う(9)仕うまつる限りして出で給ひ、御送りの人々、見奉り送りて帰りぬ。おはしましぬと人には見(10)え給ひて、三日ばかりありてこぎ帰り給ひぬ。(11)

(1)「世の中での随一の宝」の意か。古本は「ひとりのたから」。
(2)かじやの工人・いもの師。
(3)(火気のもれないように)かまどのまわりを三重にかこいこめて、の意か。
(4)底本「たくら」。諸本によって仮りに改めた。
(5)以下「あけて」まで難解。誤写があろうか。「領有なさっている荘園の全部十六か所(の収入)を」と仮りに解いておく。
(6)「守に公帑を開け(させ)て」「守に(命じて)公帑を挙げて」「守に公帑を上げて」「上に竈突(クヤ)。かまどのうしろにある穴)を開けて」など諸説のほか、「料(カテ)に公帑を開け(マタハ挙げ)て」「守に倉(クラ)を開け(させ)て」の誤などいろいろの考えが公にされているが、いずれも、疑わしい。古本は「しらせたまへるかぎり十二方をふたぎかみにくちをあけて」
(7)三千年に一度、金輪王が世に出るとき、花が咲くという想像上の植物。金光明経讃仏品「希有希有、仏ノ出ヒ於世ニ如ニ優曇華ノ時ニ一タビ現ルル耳(ノミ)」
(8)大声でさわぐ。

かねて事皆仰せたりければ、その時ひとつのたからなりけるかぢたくみ、六人を召しとりて、たはやすく人寄り来まじき家を造りて、かまどを三重にしこめて、たくみらを入れ給ひつゝ、皇子も同じ所に籠り給ひて、知らせ給ひたる限り十六そを、かみにくどをあけて、玉の枝を作り給ふ。かぐや姫のたまふやうにたがはず作り出でつ。いとかしこくたばかりて、難波にみそかに持て出でぬ。船に乗りて帰り来にけりと、殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさまして居給へり。迎へに人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物おほひて持ちて参る。いつか聞きけむ、

「車持の皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」

とのゝしりけり。これをかぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。

かゝる程に、門をたゝきて

「車持の皇子おはしたり」

と告ぐ。

「旅の御姿ながらおはしたり」

といへば逢ひ奉る。皇子のたまはく、

「命を捨てて、かの玉の枝持ちて来たる」

とて、

「かぐや姫に見せ奉り給へ」

と言へば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に文ぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでさらに帰らざらまし

これをも哀れとも見てをるに、竹取の翁走り入りていはく、

「この皇子に申し給ひし蓬莱の玉の枝を、一つの所あやまたず持ておはしませり。何をもちてとかく申すべき。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずして、おはしましたり。はやこの皇子に逢ひ仕うまつり給へ」

と言ふに、物も言はずつらづゑをつきて、いみじく歎かしげに思ひたり。

この皇子、

「今さへ何かと言ふべからず」

(1)主語は翁。

(2)「来たる」の下に「ことよ」など省略。(「来たる」を四段動詞とみるべきではあるまい。)

(3)「をり」は、もと低い姿勢ですわっている意といわれる。中古の用例からみても、こちらがひけ目を覚えて、対者に対しているような場合に用いられているようである。

(4)「つら」は、ほほをいう。

(5)こうなった今においてまでも。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com